

# 5 県央地域における野生イノシシのサーベイランス強化の取組みと豚疾病浸潤状況調査

中央家畜保健衛生所

牧野 央孝・元村 泰彦

豚熱(CSF)は平成30年に岐阜県の養豚場で国内26年ぶりに発生し、さらに野生イノシシで感染が確認されたことを受けて野生イノシシサーベイランス検査が始まった。その後もCSF感染確認地域は拡大し、九州では令和5年8月の佐賀県の2つの養豚場での発生に続き、翌年6月には発生養豚場周辺において野生イノシシへの感染事例が初めて確認されたことから、本県へのウイルス侵入の恐れが高まった。このため更なる野生イノシシのサーベイランス強化が必要となったことから、今回、関係者と連携した取組みを実施した。

加えて、CSF以外の豚疾病の清浄化の維持・推進のためにも、野生イノシシの感染状況の把握が重要であることから、貴重な検体採取機会を有効に活用し、豚疾病浸潤状況調査を行ったので、その概要を報告する。

## 1 野生イノシシのサーベイランス強化のための体制整備

令和4年3月に山口県での野生イノシシの感染確認を受け、令和4年度から九州での野生イノシシのサーベイランスが強化された。令和4年度以降、県全体としては計画を上回る実績が得られたが、管内においては令和4年度が81検体、令和5年度が77検体の実績であり(表-1)、県全体の実績に占める割合は低い状況であった。

表-1 野生イノシシサーベイランスの実施状況

単位:検体

年度	H30	R1	R2	R3	R4	R5
計画	-	-	-	299	299	299
実績	6	4	41	67	315	316
うち、管内	4	2	8	25	81	77

佐賀県での野生イノシシ感染事例を受けた管内の対応として、情報共有と注意喚起、全養豚場の一斉緊急消毒の実施、飼養衛生管理基準の遵守指導を実施するとともに、野生イノシシのサーベイランスについて更なる強化が必要となった。サーベイランスの強化は特に県境市町を中心に行い、管内では2市3町で160検体のサーベイランスを6月から9月に実施する計画を立てた(図-1)。従来の取組みでは、目標検体数に到達することが難しい状況であったため、管内全市町への協力要請、猟友会・ジビエ処理施設への協力依頼、市町における検体数増加に向けた新たな取組みを実施した。

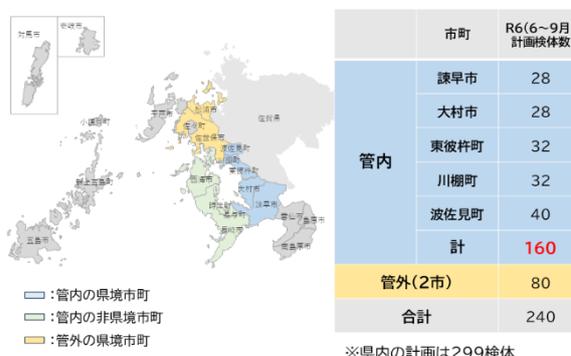


図-1 県境市町でのサーベイランスの強化

### 管内全市町への協力要請

令和6年6月中旬に、サーベイランスを強化する県境市町に加え、管内全市町(4市5町)の有害鳥獣部局に訪問し、捕獲野生イノシシにおけるサーベイランスへの協力を要請した。協力要請にあたり、CSFの発生状況とサーベイランスの必要性を説明したほか、採材に必要な資材を提供し、その使用方法についても説明を行った。また、連絡体制や検体の輸送方法を協議し、病原体拡散防止対策についても説明した。

協議の結果、全市町から協力の意向が示され、そのうち全ての県境市町と2町から実際に検体提供を受けた。

### 猟友会・ジビエ処理施設への協力依頼

令和6年7月から8月にかけて、市町の協力の下、4猟友会ならびに管内全てのジビエ処理施設6カ所を訪問し、処理施設に搬入された捕獲野生イノシシにおけるサーベイランスへの協力を依頼した。協力依頼にあたり、市町と同様に説明・協議したほか、半径10km圏内でCSF陽性の野生イノシシが確認された場合の対応についても説明を行った。

その結果、2カ所のジビエ処理施設より検体提供可能との回答を得た。これらのジビエ処理施設で検体採取を行う体制を整えるため、週1回、定期的に検体の保管状況を確認し、家保職員が訪問して検体を受け取るようにしたほか、ジビエ処理施設においては解体時に検体を個別に保管するように依頼した。

### 市町における検体数増加に向けた取組み

従来の方では、一部の市町で採材担当職員が常時現場に行けず、採材出来ないまま処分場へ搬送された事例を多数確認した。そこでイノシシ捕獲の際、市町から家保に連絡をもらい、止め刺し後のイノシシを、採材担当でない市町職員が家保へ運搬し、家保職員が家保で採材を実施する体制(図-2)を構築した。

問題点:現場での採材が困難⇒採材担当職員が常時現場に行けない



解決方法:捕獲後、検体を家保まで運搬し採材する体制を構築



図-2 市町における検体数増加の取組み

これらの取組みの結果、市町による採材及び家保に運搬される検体を多く確保することが可能となった。さらにジビエ処理施設での検体採取体制整備以降、より多くの検体の提供を受けることが可能となり、ジビエ処理施設からの提供によるものが多くを占めることとなった(図-3)。令和5年度に検体数が伸び悩んだ10月以降も令和6年度は順調に確保することができ、令和6年度は340検体と前年度と比較して263検体増加することができた(図-4)。なお、1年間の採材の内訳は、市町による採材が143検体、家保に運搬され採材した検体が38検体、ジビエ処理施設での検体提供が159検体であり、またCSFについては遺伝子検査と抗体検査、アフリカ豚熱(ASF)は遺伝子検査を行い、すべて陰性であった。

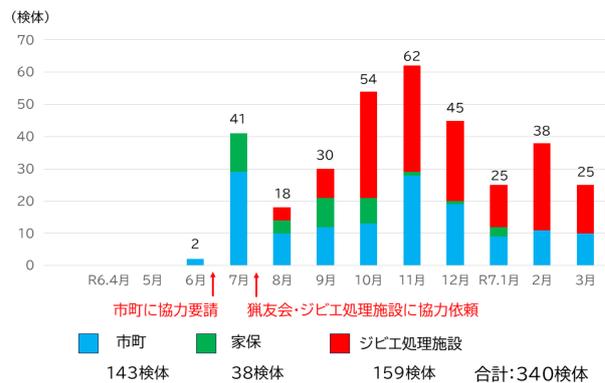


図-3 サーベイランスの検体数(月別・採材場所別)

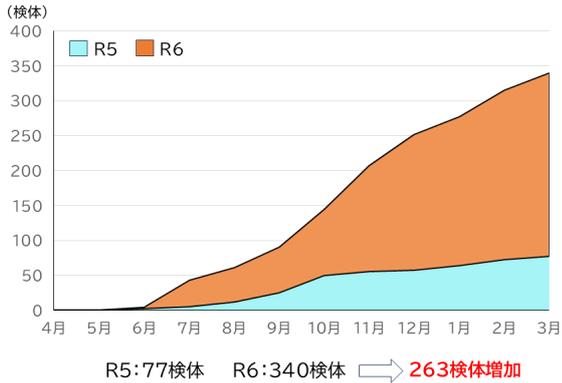


図-4 令和5年度と令和6年度のサーベイランス検体数の比較

## 2 サーベイランス結果と豚疾病浸潤状況調査

管内養豚場での衛生対策強化と広報・周知を目的に、野生イノシシにおける豚疾病浸潤状況調査を実施した。使用した検体は令和6年6月から令和7年2月にかけての野生イノシシの血清 289 検体で、管内の養豚農場での疾病発生状況に基づき、豚丹毒、豚胸膜肺炎 (App)、豚繁殖・呼吸障害症候群 (PRRS) について、抗体検査 (表-2) を実施した。

表-2 豚疾病浸潤状況調査の抗体検査項目

検査項目	検査方法
①豚丹毒	生菌凝集反応
②豚胸膜肺炎(App)	ELISA
③豚繁殖・呼吸障害症候群(PRRS)	ELISA

豚疾病浸潤状況調査の結果、豚丹毒は 288/289 (99.7%)、App は 219/289 (75.8%)、PRRS は 3/289 (1.0%) で陽性が確認された (表-3)。この結果については、家保の広報誌や会議等において CSF、ASF のサーベイランス結果とともに周知した。

表-3 豚疾病浸潤状況調査の結果

検査項目	検体数	陽性 (陽性率)	陰性
豚丹毒	289	288 (99.7%)	1
App	289	219 (75.8%)	70
PRRS	289	3 (1.0%)	286

## 3 まとめ

今回、佐賀県での野生イノシシ CSF 感染事例を受け、サーベイランスの強化のため、関係機関と連携して野生イノシシのサーベイランス強化のための新たな取組みを実施した。市町への協力要請、猟友会とジビエ処理施設への協力依頼、市町における検体数増加に向けた取組みの結果、サーベイランス検体の大幅な増加を実現し、令和6年度は 340 検体でサーベイランスを実施する成果が得られた。

佐賀県においては、イノシシの CSF 感染地域が拡大しており、管内に近づいている。養豚場における CSF 発生防止のため、野生イノシシにおける感染状況の把握は重要性を増しており、強化サーベイランスを継続する必要がある。今後もより多くの検体を確保するため、サーベイランスの重要性をより多くの関係者に共有・理解してもらうほか、結果を迅速に共有するなど、さらなる関係者との連携による円滑かつ効果的な実施体制を構築していくことが必要と考えられた。

また今回、サーベイランスの余剰血清を用いて豚疾病浸潤状況調査を実施し、管内で発生がみられる豚丹毒と App で高い陽性率が確認された。これまで、本県や九州における野生イノシシの豚疾病浸潤状況調査は報告されていないが、過去の全国調査では、豚丹毒が 96%、PRRS が 0.7% で陽性と報告されており<sup>1)</sup>、類似した結果であることが確認された。この結果については、養豚場における衛生管理の向上や発生防止対策の一助として活用するほか、人獣共通感染症である豚丹毒で高い陽性率が確認されていることから、捕獲・狩猟関係者への感染防止対策の啓発や注意喚起も必要と考えられた。

## 4 参考文献

1)大崎慎人ら：野生イノシシにおける家畜疾病の全国調査. Proc Jpn Pig Vet Soc No.74 (2019)